

H28.7.11
京都朝刊

争点隠しで論戦低調

改憲勢力が3分の2に達したことを受け、自民党は今後、改憲手続きを進めるだろう。今回の参院選の戦術は巧みだったが、改憲の信を国民に問うたとは言えない。先の参院選と衆院選でも経済政策を争点にし、選挙後に特定秘密保護法と安全保障関連法を制定した。3度目となると政治不信はさらに深まる。今回の選挙は戦後憲法の転機だったと将来評されるだろうが、肝心の論争がかみ合わない形で終わったことは残念でならない。だが、学生や母親が政治に発言し始めたことの可能性にも着

山室 信一氏

京都大人文学研究所教授

(法政思想連鎖史)



目すべきだ。選挙戦を通じて与党が攻勢を掛け、本来は攻める側の野党が守勢に回る構図だった。アベノミクスの実績を前面に出し「(民主党政権だった)3年半前に戻っていいのか」と迫る与党に対し、野党は失敗を指摘しても対案は出さなかった。野党共

闘でも、民進党に改憲派がいることへの不信感があり、与党に「野合」と攻められると弱かった。「生活に直結しない憲法と安保は票にならない」が政界の常識だ。与党は争点隠しに徹した。野党は安保法の制定過程で強まった要請を受け、憲法と安保を争点に据えざるを得ず、戦術面で厳しい選択を迫られた。争点設定のずれと争点隠しの結果、論争は低調だった。有権者が政策を評価するというより、負のイメージが拭えない民進党よりも可能性を説く自民党に賭けたことが与党の

圧勝につながった。安倍首相は秋の臨時国会から憲法審査会で改憲議論を始める意向だ。どの条項から着手するかが焦点になる。改憲勢力内でも重視する条項は党で異なるため、合意を得やすい緊急事態条項や家族条項などから進める可能性が高い。参院選の結果、より多くの改憲派議員が審査会に入る。民進、共産両党の対応が注目される。民進党は刷新を迫られるが、改憲に関して明確な方針を提示しなければ議論はさらに混乱する。安倍首相は審査会の審議優先を理由に国会審議を避ける恐れがある。国会審議が可能になったことでこれまで以上に重い説明責任を負ったことを自覚し、安保法審議のようにはぐらかさず、正々堂々と議論すべきだ。(聞き手・吉永周平)